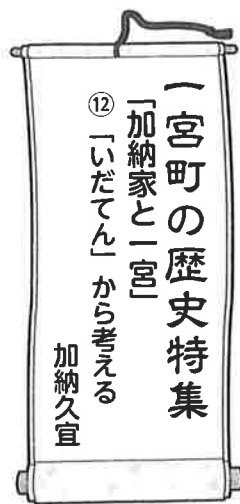


平成31年3月号



今年度連載してきた「加納家と一宮」の最終回の今回は、NHK大河ドラマ「いだてん」と加納久宜について見ていきたいと思います。

現在放送中のNHK大河ドラマ「いだてん」は日本とオリンピックがテーマの物語で、第1章として、始めて日本人としてオリンピック（ストックホルム、明治45年・1912）に参加した金栗四三（1891～1983、マラソン）が取り上げられています。そのオリンピック出場をめぐる、出場を目指す嘉納治五郎（1860～1938）に反対する、日本体育会（現日本体育大学）会長として久宜が登場します。

久宜とスポーツ（体育）については

文献が少ないですが、ここでは限られた情報から見ていきます。

久宜の体育活動とのかかわりは、廃藩置県後に大学南校（後の東京開成学校、東京大学の前身）にて、体育的施策を学んだことに始まるようです。

明治10年（1877）、久宜が岩手師範学校校長に着任すると、様々な教育改革に臨みます。その中で、久宜は

座学だけでなく、体を動かすことが大切であると考え、雨の日でも運動ができるように、室内運動場（いわゆる体育館）を校内に建設しました。この試みは全国的な先駆けとなったようで、この後久宜が自らの著書の中で体育館の設置を提言すると、全国的に体育館が設置されるようになったといえます。また、「体操」科、「体操術」科といった科目を設置し、自ら指導にあたりました。

そして明治34年（1901）に日本体育会の会長に就任しました。明治37



▲ 岩手県師範学校「東宮行啓記念写真帖」(1908) 国立国会図書館デジタルアーカイブより

年（1904）には体育教員を養成する実習校として、荏原中学校（現日本体育大学荏原高等学校の前身）を設立、初代校長として当時の最先端の洋式体育教育の普及に努めました。

「いだてん」の中では対立する組織の長として、敵役のように描かれています。このように見ていくと、必



▲ 日本体育会発祥の地石碑 (東京都新宿区原町3丁目)



▲ 日本体育会体操学校の跡 (東京都千代田区九段南 1-6-11)

ずしも、体育に否定的であったわけでもないことが分かるのではないのでしょうか。二人の「カノウ」（加納・嘉納）はオリンピックに対する認識こそ違えど、日本を体育・スポーツの面で発展させたいという志は同じだったはずで、おそらく「学校教育」の中に位置付けられ始めたばかりの体育を、世界に発信するには時期尚早である、というのが久宜の思いだったのではないのでしょうか。

ちなみに、久宜は治五郎にオリンピックを打診された際、日本体育会は財政的に厳しく、そのような大事業はできないので、自分たちでやってくれ、

# 【広報文化財コラム】「一宮の歴史特集」②⑩

平成31年3月号

と発言したといえます。本音は、果たしてどうだったのでしょうか。

さて、これまで12回にわたり、加納家と一宮について連載をしてきました。最後に没後100年ということので久宜について、私の雑感を記して終わりたいと思います。

久宜という人物は多方面において、様々な功績を残してきたことはこれまで記してきた通りです。彼の考え、根底にあった理念は何だったのかと考えたとき、それは「富国」と明治天皇への敬意だったのではないかと思います。明治天皇への敬意というのは、自伝をみても読み取れますし、鹿児島県知事時代の学校の御真影にまつわる処罰であるとか、国に先行して一宮において明治節（明治天皇の天長節を公休日とする）を導入したらしいことからわかります。国家に対する強い意識というものがその根底にあったように思われます。

そして重要なことは富国を目指すうえで、久宜が「国政」という立場ではなく、あくまでも地域から盛り上げていくこととした点にあるのではないのでしょうか。欧米に倣った最先端の文化や技術を導入し、富国を地域から興していった、まさに「地方創生」の先駆けが久宜だったように思えます。

久宜が、没後100年のこの年に大河ドラマに登場する、そして来年一宮にオリンピックが来る、というのはなにか運命的なものを感じます。皆さん、この機会にぜひ「加納さん」のこと、一宮の郷土の歴史に触れてみてはいかがでしょうか。

（文責：町学芸員 江澤一樹）

（歴史特集「加納家と一宮」終了、次回以降は「ゆかりの人々」「文化財」を紹介します）